

タイトル

所沢の家

講評

建物へのアプローチは、屋上にあるエントランスドアただ一つだけ。そこから、コナラの森へ、自然の中へ下りてゆく。かつて、フランク・ロイド・ライトが落水荘を設計した時のように、建物の存在感を、自己主張をできるだけおさえ、自然との一体を、自然との共生をはかっている。

また一方で、敷地の傾斜を利用して、室内各層からの外への、自然への視界のひろがりをも十分に確保している。室内3層をつなぐ吹抜けはたて空間を一体とし、上階からおりる夏の冷気と、下階から上る冬の暖気とを、自然を利用した換気計画により通年を通してコントロールしている。そして、トップライトからは入り込むひかりとともに、こちよい住空間をつくりだしている。

建設地の特殊形状を上手に利用した素晴らしい作品である。(審査委員:片瀝重幸)

データ

- 所在地 ■ 所沢市
- 構造・階数 ■ 木造一部RC造・地下1階、地上2階
- 敷地面積 ■ 496.57㎡
- 延床面積 ■ 120.58㎡
- 建築面積 ■ 38.79㎡
- 完成年月 ■ 平成22年4月
- 総工事費 ■ 約5,000万円
- 居住者構成 ■ 15歳未満:1人、15歳以上65歳未満:2人
- 設計者 ■ 棟尾建築設計工房 棟尾 聡
- 施工者 ■ 平成建設株式会社
代表取締役社長 市川 信明

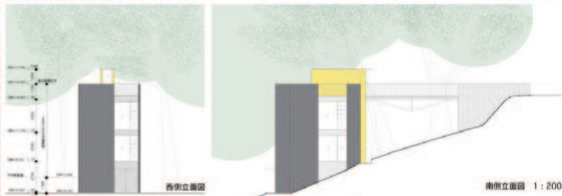


所沢の家

計画地はコナラの森に囲まれた自然豊かな北斜面地にあり、この敷地を自然共生のできる住まいへと変えて行くことが計画の目的である。

設計では既存の建物を解体し、敷地の傾斜に沿って階段状に建物を配置すること、緑の中からここであること意識した。自然の地形に沿って建物の配置をすることで自然と共生できるような、高さの検討や材料の色合いの検討を行い、自然共生を促した。また内部は「空間」として設計し、自然の中を歩けるような心地よい空間を創出している。階段や吹抜けなど、自然の恵みを活かすことで、自然との共生を実現した。これらにより、自然との共生が実現している。

また、人間的な暮らしに寄り添った空間を創出し「住まい」ことへの価値を高めてくれる住居を目指した。



1. 緑地、地形を尊重した設計計画

建物本体が既存の建物の跡地に建つようにするための設計より、自然の地形に沿って建物を配置すること意識した。これにより、建物は自然の中に入り込むように配置され、自然との共生を実現することになる。この敷地の地形は、中心に階段状にして、自然との共生を実現している。階段や吹抜けなど、自然の恵みを活かすことで、自然との共生を実現している。

また、人間的な暮らしに寄り添った空間を創出し「住まい」ことへの価値を高めてくれる住居を目指した。



2. 自然条件に合わせた設計計画

緑を住まいの環境の一部と捉え、自然の中にあることを意識し、自然との共生を実現すること意識した。また、自然の中にあることを意識し、自然との共生を実現すること意識した。また、自然の中にあることを意識し、自然との共生を実現すること意識した。



3. 緑地を中心に創出した設計計画

緑地を中心に創出した設計計画。自然の中にあることを意識し、自然との共生を実現すること意識した。また、自然の中にあることを意識し、自然との共生を実現すること意識した。



4. 自然条件に合わせた設計計画

自然条件に合わせた設計計画。自然の中にあることを意識し、自然との共生を実現すること意識した。また、自然の中にあることを意識し、自然との共生を実現すること意識した。



住まい手から一言

ここで暮らしてみた実感として、夏季には北斜面に折り重なる厚いコナラの葉で日射は遮られて柔らかな木漏れ日が心地よく、芽吹き前の季節は梢のあいだから陽光が満遍なく降り注ぎ、四季の移り変わりと建築の協調は絶妙であると感嘆している。

この家は平面的にも断面的にも仕切のないワンルームで、中央の階段が空間を緩やかに区分するのみである。窓を開ければ爽やかな風は縦横に吹き抜け、木立による日射遮蔽と相俟って、夏季には殆ど冷房を必要としない。計測された室温をみると酷暑の期間には2階部分で30℃を超えるが、開放的な暮らし方に慣れてしまうと扇風機でもかなり凌ぐことができ、人間はアダプティブな存在であることを再認識した。また、窓も網戸付のオーニング窓としたことで、雨天や不在時にも開放して通風を中断しないで済むこと

も、重要な点であると思う。虫も多い土地であるが、玄関を虫の少ない高さを持ち上げて道路とブリッジで繋いだことにより、室内で殺虫剤を使うことはない。この夏は数日、非常に蒸し暑い日があったが、2階に設置したエアコンだけで全体を快適に保つことができた。一般に宅地として北斜面は敬遠されるようで、この土地も隣接する平地に比べて格安であった。そのため、隣地や道路から十分なバッファー空間を確保することができ、境界にはフェンスもない。近隣を気にせず、むしろ積極的に窓を開けたくなるような配慮こそが、サステナブル建築の原点であると、暮しながら再認識している。

この家で生活していると、自然から効率よくエネルギーを搾り取るうとする従来の考え方から脱却し、自然の恵みの一部を享受させていただくという、我が国古来からの謙虚な姿勢になるように思える。